

近江商人の家定について

威

田

珍記

○ 序

本稿は筆者家に傳わる江州大藏村井伊兵衛家の家定の紹介を主たる目的とするものであるがこれに肉連して南部親に於ける近江商人の活躍についても言及したい。

○ 近江商人の活躍

少くとも徳川時代から云い古された俗諺に「近江泥防に伊勢を食し」と云う語がある。近江人士の中には之を解して、めれば「近江道楽伊勢子正直」の向違であるとし、或は又泥防とは放蕩の事で、盗賊の諷に非ずとする説もある①。

しかし、これは勿論近江伊勢両国商人が商賈と察するに敷にして盛んに他国に活躍し、他に先んじて巨利を博する有様を羨望し且つ憎悪しての悪罵であ

ると解すべきものである。時には諺そのもののズバリ的に天井の無い近江蚊帳を賣付けたりして「*Yam, Chen, ut, Joushen*」(交換は欺瞞なり)を地でいった場合もあつたものらしく、かゝる行為が近江泥防なる語を生んだ一起因ともなつてゐるかも知れぬが、この様な欺瞞行為が不斷に行われたとは考へられぬから、この諺は矢張り羨望的悪罵であつたと解すべきだろう。

又徳川時代誰云うともなく云ひ土された「主人は大阪、女房は京都、番頭には江州、蔵番には長崎、小僧としては江戸」②と云う諺は近世に於ける理想的商人像を画いたものとして面白い。

ここに「番頭には江州」なる語は、近江商人の経営方法が、本店は近江に置きながら、その出張つまり支店を京・大阪・江戸・松前・南部その他に置き

支配人としてこれらの出店の経営に任んぜしめ、而も之等支配人は何れも本店以上の優秀な成績を挙げ、事が多かつた事実によ來するものである事云うこともない。

以上面談とも近江商人がその経営才能非凡にして到底他国商人の之に追いつき得なかつた事を物語るのである。

近江商人の発祥は古く、既に中世以前、中郡即ち瀬田・神崎・愛知・犬上・諸郡を中心とし、各地に市・市座を設け、その特權に基き土いに商權を拡張したのであるが、その活躍が特に盛んとなつたのは、我々商業が漸く近代的发展の途についた近世中期以降の事に屬するのであるが、実は近世中期以降の我々商業の目覚ましい発展こそは近江商人の活躍に負う所極めて大なるものがあつたのである。

近世に於ける近江商人の活躍の一端を岡田文雄氏の「八幡誌」によつて窺つてみよう。

即ち「其商業は太田通なる事は西は長崎薩摩、東は南郡津輕は云に不及、松前函館蝦夷地迄も行渡り、或は国々に土店を出し、或は海陸通衢往來して大利を營む事、誠に諸国商人の敢て及ぶ處にあらず。其

仕方譬は、國産口申に不及、京都大阪西國筋一切名産を東國へ持下り、専路には仙台北陸、下野越前、土羽紅花、近代流行する上州絹生、越前物類、其他夷地の昆布、穀ノ子類を廣登りて、上方西國等へ捌ける事、大に財なる交易なり。かゝる故に其利分「ヒサゴ」の子を生ずる如し。其根元を尋るに金にアフリカ人に「アフリカ」と。

近江商人の商業活動は、たゞに我々国内に限られず、対安南・暹羅貿易に従事するものもあつた。

以上の如く近世に於ける近江商人の活躍は広く國の内外に及んだのであるが、一口に近江商人と云つても、その出身は大別して、八幡・日野及び五箇荘の三方面に分けられる。何れも琵琶湖東岸中部に屬する地域であるが、近松文三郎氏は、より一般的に行われる近江商人三集團として、八幡・日野及び中郡の三集團をあげている。

ここで中郡とは菅野氏の云う中郡即ち瀬田・神崎・愛知及び犬上中より、八幡及び日野の屬する瀬田郡を除かれ、神崎・愛知及び犬上の三郡としたものであろうしいが、この場合、中郡の中心をなすものは、神崎郡であり、神崎郡の中心をなすものは旭、南五

園莊及び北五箇莊の三村に跨る所謂五箇莊商人の出身地である故、菅野氏の分類と実質的に同じであること云つてよい。

ところで、一般に近江商人と云われていても、彼等はその出身地を異にするに従ひ、營業の種方法等夫々の特色を有していたが、彼等の性格を物語る俗諺に「八幡旦那に日野衆、中郡泥坊」なる語が近江にはあるそうである。この語に対し近松氏は「是によれば、八幡は大層評判宜しきやうだが、又一面澁漑たる商界に迂曲なる悠揚の態度を非難せるにはあらざるや。

日野衆、是は商人衆の衆にて普通おとなしやかな商人、即並の商人方と云ふ意味ではなからうか。

中郡は近江泥坊の代表者の如く、イヤナ評を独りで貰つたかの歟があり、実にお気の毒十万だが、反面あくまで、他を排斥して飛躍突進する意気旺盛なる状態を云ひ現わしたるものと云うべきか^⑧と述べて居られる。

近江商人の性格に假令斯くの如き相違点ありとすも、それ口程度の差にすぎぬものであり、近江商人一般の他国商人に対する優劣性を否定するものでない。

はない。

然らば斯くの如き近江商人は如何にして出現したか。その起源については諸説があるがそのうち、農民窮乏説(司馬江漢「春波樓筆記」、八幡商業学校「近江商人」)、琵琶湖説(喜田貞吉博士「古代の商人」)、交通要路説(三浦國行博士)等に対し、菅野氏は、以上の諸説は何故中郡のみより近江商人の輩出が盛んであり、中郡と同條件にあり或は中郡より窮乏の甚しかった湖西即ち高嶋郡に大商人が輩出しなかつたかを説明出来ないとし、牧野信之助氏の市座説^⑨に同意し、更に進んで、郷土人説を主張して居る。

近江商人の起源については尚諸説あるが今これに言及する暇はないし又先にあつた諸説の当否を論ずる暇もないが、唯私が今取上げたいのは、菅野氏が前説否定の根據としてあつた湖西より大商人が輩出して居らないとする点である。菅野氏は「日本会社企業発主史の研究」に於いては大瀬商人小野組の活躍について述べて居られるから、湖西より大商人が全然輩出しなかつたと断定せられたわけでは無く近世以前湖西より大商人は出なかつたと限定付きで解

すべきものようであるが、明治草創期に於いて、政府に對し巨額の献金をなし、三井組、島田組と共に東京為替会社、大阪為替会社、西京為替会社及び第一銀行の創立に當った小野組は實に湖西高嶺郡大瀧村の出身であつたのである。而もこの小野組一族は南部領内に於ける近江商人の主流をなすものであり又京・大阪に於ても相當の地位を確立してゐたのである。

○ 南部領に於ける近江商人

江州高嶺郡大瀧出身の近江商人の活躍に注目した研究には、滋賀縣八幡、近松文三郎氏の「隠れたる近江商人大瀧出身小野家一族」(太湖要百十二号—百二十八号)、森嘉兵衛氏の「旧南部藩に於ける近江商人について」(太湖要百九号)、陸奥産金の沿革(社会経済史要六卷要六号七号)、「南部藩近江商人の研究」(岩手史学研究第一卷第二号)及び「岩手を作る人々」下巻、一ノ倉則文氏の「盛岡藩に於ける経済学者」其ノ三があるので詳細はそれらを参考にせられたい。

近世南部藩内に於いて活躍した關西商人には、堺

出身の木津屋、美濃國の美濃屋、伊勢出身の伊勢屋等の外に、江州蒲生郡日野町を中心とする日野商人の系統及び江州高嶺郡大瀧町を出身地とする小野組の系統の二つがあり、その主流をなすものは、大瀧出身の近江商人であつた。

而して南部領内に於ける大瀧商人の系統には、小野村井の両家があるが元来両家は同一の始祖より發してゐる模様である。

両家のうち盛岡城下に最も早く土着したのは村井新七であり(慶長年間)、今の假治町花屋敷之の祖であるが、一方小野の系統は、大瀧小野新四郎の長男善五郎より、小野善助即ち京都村井屋の祖が出發、又新四郎の二男權兵衛口寛文の頃未盛、村井權兵衛を名乗り志和の祖となり、善五郎の二男權兵衛と善子とし、京都鍵屋及び郡印(井筒屋)の祖たらしめ、更に善五郎の四男清助とも善子とし、紺印の祖たらしめ、又更に、大河内清右衛門三男を善子とし左印へ村井左兵衛の祖たらしめてゐる。而して郡印より、小野宇兵衛即ち芳印が出てゐるし又小野新四郎の三男又兵衛は、日詰の柳屋へ村井又兵衛の祖となつてゐると云う具合で、村井權兵衛が

志和に土着して僅々数十年にして其の勢力を拡大し、宝暦の初頃には遂に南部藩に列ぶものなき賤賈を形成するに至つたのである。

これに判教され、近江より口更に、高崎屋、大塚屋、丸屋、江州屋、日野屋等来臨、彼等口やがて南部藩賤賈を支配するに至つた。

彼等が各地より南部に移入せる商品には、木綿、京細物、カルタ、三味線、雪太、砂糖、古玉、美濃茶、綿、にかわ、曹達焼茶碗、ろう竹、竹簾、線香、京墨、シエロ事、竹柄杓、茶室、京唐紙、美濃紙、油、蠟燭、位牌、櫃、硯石、傘、扇子、紅猪口等があり、南部より移出せる商品は、米、大豆、馬、銅、苧木、干鰯、魚類、海草、紫根、多葉粉、蠟燭、淨法寺宛等であつた。

彼等四これら物品販賣業に従事する外、酒、醤油の醸造、金融業、旅宿業等に従事、南部地方に於ける全経済の分野に於いて主動的地位を占めていたのである。

④ 近江商人の家定について
近江商人の経営組織

近江商人が近世我國各地に於いて大いに活躍したについて口、その特有なる経営組織乃至は経営方針が預つて力があつたわけである。而して其等の経営方針より組織より口、近江商人の家に代々傳わる所の家憲・家法・家訓・家凡書及至は家定・家定書の中に大部分或は一部分が示されてゐる事が多い。

以下江州高嶋郡大蓋の商人大塚屋村井伊兵衛の出店たる筆者家に傳わる家定を中心として、近江商人の経営方法の一端を窺ふ事としよう。

「近江の千兩天秤」なる諺があるが、これは、近江商人は天秤一つにより千兩もの富を築いた事、又、近江商人は千兩の分限者となつても尚一本の天秤を肩に全国を行商した事を示す諺であろう。誠に行商こそは近江商人の眞面目を示すものであるが、彼等は富山商人と違い、終生行商のみで終始したわけでは無く、「三里四方鍋飯を食う所へ店を出せ」の諺の如く、行商しながら購買力の大きい地方をみつけろや、其の地に必ず出店を設け定着し、本店の指揮下に商業その他に従事するのが普通であつた。

筆者家は石田三成の末裔と云われ、もと石田姓を稱していたが、初代石田喜平治は、元祿の頃、大蓋

村井伊兵衛の出店たる八戸大塚屋より商賣物を請賣し、南部と戸村に於て渡世していたが、その後により、村井伊兵衛の一族村井治助を養子に貰うけ、これが三代目石田喜平治となり、大塚屋の屋号を各乗る事と許され、ここに大藏大塚屋の出店格となるに至った。爾来と戸大塚屋は戸を中心とする數十ヶ村に商賈を拡張し、有能の士を養子とし後之を支配人として、別に江州屋・松坂屋の二店を經營し尙外に大塚屋忠右衛門家を別家せしめ、宝曆の頃には完全に七戸地方數十ヶ村の商業を独占するに至り、金融業を兼ね、兼併せる土地からの小作米による造酒業を兼営、更にそれによつて土地を兼併して所謂新地主と云つた常道を踏み、宝曆六年には御給入即ち「金上郷士」となり盛田姓を賜わり、通稱盛喜と呼びれる地位を形成するに至つた。

この様に大藏商人の出店設立方法は、左の小野組の場合並に華商家の事例が示す如く、多くの場合養子別家制度と云う最も堅実なる方法をとつたのである。養子となる者は本店の一族の者か、少くとも本店所在地の有能な士であつた。

かくて、出店は更に出店を生むと云つた具合で細

の目式に出店の数が増え、その勢力範囲が拡大していつたのである。

本店より出された支店は、支配人が支店帳となり、本店の主人の名代として店員を指揮監督し、一切の経営上の責任を負つた。しかし、別項家定が示す如く、重要な経営上の事項については支配人独断ではなく、加判連中と協議の上実行する事を要求されていた。

店員組織は、支配人の下に年寄・手代・手代並等であつたが、年寄の職分は明瞭にされてゐない。前述の加判連中には年寄になつたものと推定される。本店と支店との資金関係、経理関係も判然と見えないが、例えば、南五箇庄村・外村宇兵衛家の事例の如く、村井家の場合も本店は支店に対し、経営資金を出資し、資金運営の全責任を支店支配人に負わせたものである事は後述「江州旦那公々被仰渡書之覽」によつて明らかである。

当地方の出店は利源がなければこれを大藏の本店に送る仕組であつた。従つて支店の経営の良否は直ちに本店の経理にも影響を与える事となつていたので、本店は常に支店の指導監督に意を用い、経営上の失

取等あれば、その支店のみならず他の全支店に對し
之が改善方法を具體的に指示した。支店に對する本
店の指導監督は、年毎に於て、勘定目録を作成決算
報告を提出せしめるは勿論、時には本店の主人が支
店を巡視し直接指導に當つた事も嘗ては無かつた
ようである。筆者家が村井家の傘下に入つたのも、
この機会が契機となつたものらしい。

⑩ 近江商人の家定書

近江商人の家定書は、家族並に店員の代々守るべ
き準則を示したものであるが、その内容を大體すれ
ば、商業経営方針（組織共）及び家族並に店員の修
身處世の道の二つに分ける事が出来る。

家定書の内容には精粗あるが、概ね、公儀第一主
義、家業出精家内和合のすゝめ、父の用心、遊芸勝
買事の禁、質素節約分限相應のすゝめ、他行の禁等
を盛っている。

これらは近世商人の家定書のおきまり文句であり、
近江商人に特有のものでもないが、当時の商人意識
を窺知する事が出来る。

しかし、近江商人の家定書は、このような積極的
原則を示すに止らず、営業上の方針を明らかにして

いる事が多い。
南部地方近江商人の筆頭たる志賀の村井家の店法
は、森鷗外により紹介されてゐるが、これも概ね前
にあげた項目を示してゐるのみで大きな特徴はない。
これに對し、左に掲げる筆者家の別家、七戸大塚屋
忠右衛門の家法は、商業上若干の營業方針及び家
存続のためにとらるべき處置等示されてゐて興味深
い。

○ 家 法

一、己百萬の福仁に相成候共主家大切に致し、和合
相續第一なり。子々孫々に向忘之千万一本家を取
失時は目前に而衆神明佛位の罰当り子孫相立不
申事頼前に有之也。

一、本家当家人無限慈悲仁出生家と亡さんど甘は迷に相
談いたし家とは昔ゆ様にしたすへし。工傳、

一、御上之義士切に相守無調法禁仕候。

一、商賈終之儀上盡員事堅無用につかしう仕向
敷候。

一、支配人は不足云子々孫々迄誓不申様堅申傳へ候
約束一に致すへし。

一、何義に而も一己の了断に而相濟不申様本家江相
談相片付可申事。

一、神佛之拜礼朝暮に能勤可申事。

一、勘定目録口不及云、身帯之儀妻子たり共、女人
に堅申面敷、嫡子ニ男其外番頭などに急事難有
之、其の義は重紙に懸之れず候向其時に可応答
也。

即ち石家定は、運上請負事貸借嚴禁、身帯の事に
つき妻番頭の介入を認ざる事、子孫に商人不遇の者
出生せる場合の處置等について規定しているが、こ
れらに彼等が如何に商業又一主義、家の存続又一主
義へこの場合の家の存続とは必ずしも血統存続を意
味せず、商業経営の担当者としての家と稱すに徹
していたかを雄弁に物語るものである。尚同時に、
本家定中には、教度に亘つて本家と大切にすべき事即
ち本家受一主義について述べているのは、一族の紐
帯が強固であつた事を示す一材料である。

レかれ、この家定も、營業方針等に若干觸れては
いるものの、未だ具體的、積極的に營業上の指針を
示したものと云えない。つまり、これらの家定書
は商業経営上の基礎的方針を示したものであるに止

る。家定書なるものは、これが普通の形態であるよ
うである。

然るに次に示す重畜家に傳わる大藏村井伊共衛の
家定は、極めて具體的、積極的に營業上の指針を示
して居り特徴的である。

重畜家には村井家の家定が三通傳えられてゐるが、
第一の家定は昭和二年（一七六五）制定のものであ
り、第二は昭和五年（一七六八）、第三は安永二年
（一七七三）制定のものである。

これら三つの家定の内容とみると、第二、第三の
家定は左の家定の改正を目的としたものではなしに、
その増補と見るべきもののようである。即ち第二、
第三の家定はそれ自体としては独立の家定の形式を
具備せず、機に臨み時に依じて補足的に追加された
ものであり、第一の家定に比し、より具體的指針が
示されてゐる。

左に第一の家定より紹介しよう。

正

一、御公儀御法度急度相守可申事。
一、火用此朝夕無油断、家内之畜等ヲ附可申事。
一、庫突並一錢之儀ニ而も諸勝負事堅無用之事。

一、米穀産株ニ相成不申様ニ氣ヲ附、下勸旨共江も兼而可申付事。

一、用事有之罷出候共行先相斷罷出可申事。

物見參詣ニ罷出候共夜深不申内釋宿可申事。

一、店中和合等一之儀ト存候。不和合ニ而ハ家内不治、是不相競之基ニ御座候。

御存知之通取立店之儀、殊更時節も悉鋪、世上困窮不商之上、近年不時損失等有之、旁以相競之程至極安心無之候。各々順和一味出精勵ヲ發申々外無之候。依之家内一和不致候而ハ何事も成就相成不申候。

別而支配人ハ家内手本ニ相成可申事等一身持心得專要ニ存候。衣類等譬身半タリ共絹氣無用、世間之勤折見廻附合等ニ至迄、人目立不申様御心掛可有之候。

且又近所江上候共断出可申候。行先相知不申事步行申様ニ而ハ人柄悪敷家内ニ而も見下々申ものニ御座候。諸事機敷事無之身瞻急度致候ニハ自然ニ家内しまり、相競之基ニ存候。此儀肝要ニ候向店中不心得之者共出来不申様ニ万端御勘并相憐可被申事。

一、年々諸仕入注文時々買置物世上取組甚登艱其外何儀ニ不寄宏輩江相談之上御取計要一之儀存候。一人了簡ニ而取計、譬利潤有之候共不本意ニ存候。隨而損失等有之候ハ、急度可為越度事。先輩者共江茂吟味相競申様兼而申付候向、支配人中宏輩何能々内談之上、諸事取計專一二候事。

一、時節も悉敷、別而近年海上荒候向、上下船積等之儀安心無之候。乍併相止メ申も相成不申儀ニ候向、萬端御勘并可有之儀存候。是又先輩江内談之上取計可被申事。

一、近年海上不宜候向、此所諸仕入階分減少致、是世盡計御心當可有之候。

少分之渡賣も堅御無用存候。宛由掛ニ相成可申ト存候。兼而渡賣ハ無用ニ申置候。

大切之初萬端内端々ト諸事御考可給專一二存候。別而勘定之断ハ能々致吟味跡々懸支よわみニ相成不申様ニ可被致候。此儀肝要ニ存候。一時之不心得万世之及難儀候。階分勘定表よわみ無之、圖不足ニ不寄太夫ニ仕立可被申事。

一、諸商等手立賣高余廢ト心懸申候得ハ、渡賣多相

成候。左候得ハ、取引も過分ニ相成、自然ト差引殊カレ損ニ相成候。先方も初取引申候節毛頭如左無之氣心感、是又不時續專之儀ハ不及申、責難不集不廻ニ相成候得バ、無是非不碍ニ相成候。

手廻リ之者共初懸意成方無據取引候者、是迄未永ク懸取組未候ハ、意人も無之候。ケ様之儀御勤并大切之時節ニ候得バ、万事内端御考、隨成御取引事ニ存候事。

一、仕馴不申商賣筋、人進候共、縣内散取組殺申候事堅無用存候。尤ニも該存筋ニも候ハ、様子具ニ面届候上ニ而、先輩共江申談、万事とくと勘并之上弥宜筋ニも候ハ、各々熟談得心之上取引可被申事。

一、店々支配人ハ不及申、手廻り並店中者迄、無別心、万事不宜品も見及面及候ハ、相互ニ無慮慮意見等申談、諸事無心置、双方分意ヲ附出橋申候様に銘々御心懸願入候事。

一、支配人ハ身上担任せ、名代之証、別而大切之身分ニ御座候。其故家内不及申、世間今も用上御公認がも御頼被為座候得バ、旁以御叮嚀ニ御取

扱取、自然ト身分心ニ着相出申取、衣類並其外万事人之目ニ相立候様ニ相成候。能々心ニ得心無之者ハ此病出来申物ニ御座候。日ニ三度我身ヲ顧ルと申古語も候得バ、能々心ヲ責メ得心之上、過分之証無之様嘆一之証ニ存候事。

一、支配人ハ右ニ申候名代之事、主人同事ニ候得バ、店中者共万事申付ニ相背不申、我一と出精相勤可申事。

傍輩ト存候得バ、得心無之内ハ不得心も有之候。此處和合不和合之基ニ候。相互ニ義理も考相勤可申事。

一、手廻り者共、店々諸代物等取賣、諸差引毛時々算用相違無之様ニ可被致事。諸分御勤、賜方々取引商賣可被申候。

是迄皆々店江眞失相懸候上、不相繞ニ及候者共、御存知之通ニ候得バ、又々取立遣可申様無之、相互ニ及難儀候。賜方々取引、万一不相繞ニ及候上ハ品ニ寄、又々取立遣可申証も御座候。右之趣銘々存候事ニ候得共、暫分向度申ヲ、能々致行未勘并無之故ト存候。此處支配人も兼而此段相心得察世可被申事。

右之條々申渡候ニモ及不申候得共、御存知之通、相統筋も別而難儀、安心懸之、朝夕心舌申ニ付、能の上ニモ能くと各々及心得申入候。別而此節之支配格別の心勞、不致存候。何分何茂忠勤相頼申分外懸之候間、店中和合御申合、御出續吳々頼入候。右之趣何茂立合店中皆々江茂能々御申渡可有之候。以上。

明和二年四月吉日

村井伊兵衛

平昌 (花押)

右の如く、村井家の家定は、全條十五條より成つてゐるが、第一條より第五條迄は、修身處世の道を、第六條より第十二條迄は、商業經營上の指針を、第十三條、第十四條は店員達の心得を、最後の十五條は商業經營上の指針と夫々指示してゐる。即ち、第一條は公儀尊重主義、第二條は火の用心、第三條は博奕・勝負事の禁であり、これらは多くの家法書の常套文句に過ぎぬが、第四條では米穀尊重主義、第五條では行先明示主義と奨励してゐる。これらは何れも修身處世の道と示したものである。第六條では、店相統の根本と店中和合に求め、併

せて支配は店の手本となるよう身持心得の要なる事を教へ、更に第十三條では、支配人の責務とその心得、第十四條では、支配人に対する店員の心得を諭してゐるが、何れも店員の和をその土台に置いてゐる。

第七條以下は商業經營上の指針と相当具體的に示してゐる。即ち、第七條、第八條に於ては、支配人が利に走り、独断専行する事を戒め、先輩との合議制を採用してゐる事は特徴的である。第九條では度責の禁、勘定表のつけ方について指示を与え、第十條では利潤追求に急なる余り、手を広げすぎる事に忠告を發し、更に義理と商賣とを厳密に区別すべき事等概略に觸れた指示を与え、第十一條では仕馴れぬ商賣には簡單に手を出さぬよう示してゐる。一口にいつて、商業經營上の方針は堅実第一主義とモットウとし、投機を嚴重に戒めていたのは注目すべき点であろう。

又第十二條に於て、店中お互の向違は互に注意しあつて店の発展と計るよう諭してゐる等当然の事とは云え、余り例の多くない珍しい規定である。しかし、以上の家定は村井家にとつて最初のもの

でないにせよ、勿論まだ完全なものではなかった。
従つて時代の進むにつれ不慮なる異口当然に捕われ
なけりばならなかつた。斯くて、前述の如く寧二、
寧三の家定が追加されたわけである。

寧二の家定に於ては、別家せる者が住々体面を潰
す如き身苦しき度世しあるに鑑み、別家の心得、持
に女房役の厘定に注意すべき事を述べている。即ち
左の如し。

定

一 先々々改別宅候者共数人有之候處、不見苦度世
相応軒相統候者無之候。万事奮然分相止ミ不申
諸事掛りまけニ相成、店ニ不慮、世向へも操失
相懸申儀ニ相成申候。別而時節も懸候間内々
物入無之様ニ致勤并、商事小軒ニ致出精候ハバ
他形堅相成、自然と土駐ニも相成宜敷道理ニ被
存候。

先寧一留主居取迎被申候ニ而も、とくと吟味有
之事ニ候。身ニ成預ニ致候儀ニ候得バ、遊女又
ハ防愚敷者ハ不及申、身分相応之取担可有之候。
是以本店始手廻中江得と致相談店始並手廻中差
支無之、可然得心ニ候ハバ相調可被申候。本店

江相談被致候ハバ、社者相談も同様ニ候。遊女
等取迎候儀、外間不慮、跡々店之為ニ相成下申
手廻り中も不得心ニ可被存候。相談等無之、
得心ニ而一分我儘了面ニ而右駐之儀有之候ハバ
此方へ相尋申ニ不及、其時之支配人か家名取上
ケ、店ハ不及申手廻中へも出入堅ク無用ニ可被
申渡候。

後々申傳右之趣支配人々兼而相心得、其時々宜
様ニ取計可被申候。以上。

明和五年九月吉日

村井伊兵衛

平昌 元押

別家相統、一族繁栄の爲に口、配属番置氏の自由
等存在しなかつたの口、むしろ当然の事であつたの
かも知れない。このような所にも近江商人の商業第
一主義が察知される。

寧二の家定は右の一ヶ條に止まつてゐるのに対し
寧三の家定は次に示す如く商業経営に關する指針九
ヶ條よりなつてゐる。

家 定

一、手廻者共並手代共別宅家名之事。
先親々家名付來使者ハ其通之訳、此已後別宅致

候者万、首尾能別宅申付候者、八家名相受可申候。
左様無之者、八家名連應可有之儀存候。將又是迄
手代並ニも無之、未々相動申候者又ハ其筋無之
者共臣、櫻リニ家名相付申儀不宜候。其者動中
善惡又ハ其道筋得と勘弁之上相受可申候。家名
相譲リ候事大切之儀存候。

一、船造立分方加入之事

御先代公堅法度之家法ニ御座候。已未舟主並廻
應方無様相續被申候共、石之所申立、堅加入無
用之事。左商賣筋工面宜品又ハ徳用筋等有之候
共、家法士切ニ相守、此儀堅無用之事。

一、漁物仕入無用之事

但し漁物商之儀ハ、格別仕入取候儀堅無用ニ存
候。たとひ運よく立身致候者も終ニ及難儀候者
世上見聞不少候。生類ヲ殺シ行末不宜直利目前
明白ニ御座候間決而仕入等無用之事。

一、類母子無惡並誦事等無用之事

手廻者共始惡意方無様方ハ相續被申候とも家法
禁制之趣申達、堅相加リ申向鋪之事。無様方斷
相立置不申候得バ、脇方へ申立ニ相成不申候。
別而其心得可有之事。

一、金銀借シ堅無用之事

近年時節柄不宜人等不直候間世上見聞申處、カ
シ餘り多及難儀候者多御座候。左商賣人之儀取
引等も不致候而ハ相濟不申儀候得共、支配人志
人了簡ニ而たるとひ少分之儀ニ而も我儘ニ致候儀
別而無用ニ存候。左先輩之者共年寄中へも内談
之上、万端取計可申事。

一、家藏並普請之儀取計可申事

諸普請之儀隨分慮忍可相成儀相控可申候。土藏
ハ大切之儀ニ候間、火ノ用心第一ニ心懸、其外
之儀ハ有合次第格別念入申向敷事。家住匠之儀
勝手能儀ニと存候得バ、年中大工止メ申事無之
物、其上色々物好出来、用立不申儀ニ過分賣等
も有之候。支配人ハ普請物、人等連申物ニ候間
此處能々勘弁、普請等無用ニ存候。打捨難所有
之候ハ、是又年寄中左輩者共へ能々内談之上
宜取計可被申候。是人了簡ニ而取計被申候儀、
堅無用と存候。

一、諸法座並停止物并賣買等堅無用之事

御公儀諸法座並其所々禁制停止之物船積或買置
等之儀無用ニ存候。

右相背應密商賣致、過分利潤ヲ得、分限ニ相成
申人も世上ニ百之事ニ候得共、此度決而浦已敷
在申向候候。終ニハ及難儀候物ニ御座候。運不
運ハ無是非事。万端正直ヲ以立商賣致可申候。
一、金銀銅鉄並以木山等其外仕馴不申商賣筋堅ク無
用之事。

一、店々加判申付候者共、勘定披見之節、帳面表不
吞込之品ハ、支配人江様子相尋可申候。印形致
計ニ而勘定表様子不案内ニ而ハ、無認候ニ存候。
加判之者共相互吟味申候而向違等無之様ニ兼而
相心得可申事。左支配人今も被下吞込申候様ニ
数量可申候。

右之條々堅相守可被申候。店中和合第一、傍輩
中身待行跡不宜品候ハ、無慮處相互ニ意見申
合、已非相讓申様ニ兼而御心懸尊一ニ存候。杜
舊も段々年寄忒も幼少之儀御存知之通、此方外
内該類置申儀成ル體成ル人も無之候。人向不定
の主進、何時も相知不申候。家店相續之儀ハ各
々江担任セ覆置申分外無之候。此儀別而大切之
儀ニ存候。永ク緊密相續申候様ニ兼御勘定御振

可拾候。左支配人中、年寄中並手廻り者共打寄
惣手代中、子供ニ至ル迄、右家法之趣謹聞、平
生是ヨ生念不申様ニ御心懸可拾候。別而支配人
身持大切之儀ニ御座候。一人之行跡又ハ忒持ニ
而店中不和合ニ相成申物ニ候向、手代中手本ニ
相成候儀、常ニ万端別而肝要存候。越又先輩年
寄中江も相談之上、諸事取計可被申候。依而家
定如件。

安永二年二月吉日

村井伊兵衛

平昌

花押

即ち第一條に於ては、別家設立、家名相續に關す
る規定定め、第二條より第八條にかけて、船造立分
方加入の禁、漁物仕入の禁、頼母子無盡等加入の禁
金銭貸与の禁、諸藩諸の禁、板荷賣買の禁、不熟陳
商賣の禁等につき懇切なる指示を与えていろ。

之等を通じて感ぜられる事は、彼等口不義の富貴
を辨し、正直、誠実をモットウとし、堅實に商賣進
世に従事すべき事を信條として居り、その結果段令
失敗しようとも、それは致し方がないと云う諦観に
徹してゐたようであると云う事であらう。

果して、このような家定は出店の者達によつて十

分に守られたであらうか。又全近江商人がこのよう
に商人道に徹していたならば、近江泥坊なる俗諺も
多分に羨望的な意味だけのものとなつてしまふであ
らう。

しかし、斯の如き家庭は、常に必ずしも十分に信
奉されたといふ限らないであらう。

即ち、安永五年、村井家の支店たる、八戸及び福
岡の両大塚屋が過分の積立を来たした時、江州の本
店より、両大塚屋に出した詰問状によれば、両店共
に、家定に反し、金銭貸し等行つていた事は歴然で
ある。而して、一支店の失敗口、これを全支店への
戒として、全支店に通達したものであるらしく、前
記両支店に対する詰問状口筆者家にも傳つてゐる。

その中の一部分を紹介して置こう。

「金銭貸付ハ御先代公法度之儀、然所、不心得ニ
而相用不申越ニ相問得候向、別而家定ニ相改申
付置候處、相背、過分積立相出、店相控不察心
ニ反候儀、疊疊不届千萬、誠以絶言詰候、以未
家定堅相守可被申事、

「店々支配人加判中双方如何也稱被申候哉、不心
得ニ相問得候、一存ニ取計申儀ハ相違有之物故

輕き事ニ茂相被之上取計申為加判申付候。支配
人一分了簡ニ而相済申事ニ候稱ハ加判ハ不申付
候。加判之者共江勘定様子等相尋候得べ一切不
否也。加判と申名計、店々同時ニ相問得申候、

肝心内證工面ハ支配人是人了簡ニ被存候。以之
外不心得、支配人も加判ハ何之為、又加判之者
ハ、自分ハ何殺と双方一向夢中ニ相問得候。

各々種ニ身帶不殊實テ申儀、日手問取之儀ニ其
日勤去リニ相心得始候而ハ段々不頼母數痛入候。
勘定ハ不及詰仕入物之多少、買置物之見立、年

中金銭差配リ一切事、支配人、加判中、年寄中
其時々打寄、得と相談、其宜敷ニ隔可被申候、
人々思入有之物ニ候得ハ、一分了簡ニ而取計

被申候儀甚以不本意、我儘之至ニ御空候。此末
万至相談之上取計可被申事、

其の云う所極めて峻厳なる一面又極めて懇切、特
に全家定を過じ、支配人の独断を戒め、年寄、加
判連中との合議制により店を運営して行くべき事と
定めてゐる處が注目される處であらう。

以上筆者家の宛本店たる江州大塚、村井伊兵衛家
の家定の内容をみて来た。村井家の家定は、生にも

述べた如く数次に亘り、増補訂正され、時代の流れに應じ又出店状況に應じ、必要なる都度出されたものであらうしい。本家定は、当時の封建的身分社会に制約された商人意識から出たものであり、公議法度の尊重、節約、身分相応を強調し、恩恵や段級心による危険なる商行為を極度に戒め、そのために合議制を採用し、保守と堅実を旨としている事は、むか物足りぬい感もするが、これ口、むしろ当時の家法書一般のあり方であつたのである。

しかし、本家定は、管む營業の種類に關し、或は仕入・販賣・金銭貸付・無盡加入等に關し、経験に基く指針を与え、又勘定表のつけ方等に關しても指示している等、まづ積極的なものを含んでいる。家法書と云ふ事が出来そうである。しかし、それ、まゝ、その傾向を示し得ると云うだけで、近世、万天下にその活躍の跡を記した近江商人の家法書としては、何となく物足りなく感んぜられるのは、積極的と言つても、封建的身分社会、職分社会を前提としこの社会意識の制約から一歩も抜け出す事が出来なかつたからであらう。

註①喜田貞吉：「古代の商人」……日本史地理学会

編「日本商人史」三〇頁参照

②赤坂文次郎：「徳川時代の商人」前掲書一八七頁

③菅野和太郎：「近江商人」……「経済史研究」第三十一号六〇頁

④菅野和太郎：「近江商人の活躍について」『経済論叢』第三十八巻第六号六三頁

⑤菅野和太郎著

⑥「太湖」第百十七号「近江商人の三集團」

⑦菅野和太郎：「徳川時代の工業と商業資本」……「経済論叢」第三十一巻第五号五三頁その他

⑧「太湖」第百十六号

⑨菅野和太郎：前掲「近江商人」五三頁

⑩牧野信之助：「陸奥期に於ける近江商人」……前掲「日本商人史」一四一頁

⑪菅野和太郎：前掲「近江商人」五八頁

⑫森島兵衛：「南部藩近江商人の研究」六頁

⑬一ノ倉則文：「鹽岡藩に於ける経済学者」其の三

⑭森島兵衛：前掲「南部藩近江商人の研究」七頁

⑮志和村近江屋權兵衛氏蔵「小野氏系図」……筆者所蔵写本及び前掲森氏「南部藩近江商人の研究」

しによる

- ⑩ 村井白扇著「勘定考辨記」上巻「仕入荷物塵送
入目ノ率」及び「交易産物之事」による
- ⑪ 青森県上北郡七戸町、「大安家文書」による
- ⑫ 同町筆耆家「盛田家文書」による

⑬ 宮本又次著「近江商人の店制及び家法書」六頁

⑭ 前掲「大安家文書」

⑮ 森島兵衛：「岩手を作る人々」下巻二二頁

⑯ 前掲「大安家文書」

⑰ 工傳とは口傳に同じ。詳細は口傳するの意